



Title	認知文法の品詞論
Author(s)	田中, 太一
Citation	日本語・日本文化研究. 2022, 32, p. 82-93
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/90720">https://doi.org/10.18910/90720</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 認知文法の品詞論

田中 太一

## 1. はじめに

認知文法では、その最初期から一貫して、品詞を含む文法カテゴリー（のうち、少なくとも基礎的なもの）は意味によって規定できると考えている (Langacker 1987a, 1987b, 2008a, 2015)。とりわけ特徴的なのは、カテゴリーの中心的成員であるプロトタイプだけでなく、全ての成員に当てはまるスキーマの規定が可能であるとする点である<sup>1</sup>。これは伝統的な品詞観と鋭く対立する立場であり、認知言語学の内部でも（場合によっては、認知文法を用いる研究者によっても）十分に理解されているとは言い難い。

本稿では、2節において、認知文法における品詞の扱いを検討した後、3節において、品詞にかんする基礎的な問題を論じる。議論を通じて、意味によって品詞を規定するとはどのようなことか、言語と世界の間をどのように理解すべきかが明らかになるだろう。

## 2. 認知文法における品詞

本節では、主に Langacker (2015) を参照し、品詞を意味によって規定する手続きがどのようなものか検討する。とりわけ重要なのは、ここでの意味には、指示対象にかんするものだけでなく、概念化の主体による心的操作も含まれるという点である。

### 2.1. 品詞認定の対象

具体的な議論に入る前に、認知文法における品詞認定の対象がどのようなものか確認しておきたい。次の引用 (1) から分かるように、認知文法では言語知識の単位は全て、実際の言語使用に由来すると考えている。言語知識は人間に予め備わっているわけではなく、使用において具体的な表現に繰り返し触れることで、徐々に定着し単位となる。抽象的な単位としてのスキーマは、具体的な単位の共通部分が知識構造において強化されることによって成立するものである。

- (1) 認知文法では、言語とは慣習化した言語単位の構造化された目録であると規定している。話者の言語知識を構成する単位（すなわち、認知的な「ルーチン」）として認められるのは、実際に使用される表現の一部として直接現れるものか、そこからの抽象化（スキーマ化）やカテゴリー化を通じて生じる、意味構造・音韻構造・記号構造のみである（この制約は実質性要件 (content requirement) と呼ばれる）。

(Langacker 2000: 8)

また、実際の言語使用において主要な役割を果たすのは、抽象的なスキーマではなく、具体的な知識の単位である<sup>2</sup>。このことは、言語使用におけるカテゴリー化の役割から自然に理解できる (cf. Langacker 2000: 4節)。使用事象において話し手は、言語的・非言語的手がかり

を用いて、聞き手の注意を話し手の意図した対象（モノや事態）へと向けようとする<sup>3</sup>。たとえば、(2)を発話する話し手は、聞き手に対して(2)が表す、「あそこ」で指される場所において、猫個体が眠っているという状態を実現しているという事態へと適切に聞き手の注意を向けるための手がかりとして、この記号列を用いている。

(2) あそこで猫が眠っている。

この手がかりが有効に機能するためには、話し手が聞き手の注意を向けようと意図している事態が、話し手・聞き手にとって〈あそこで猫が眠っている〉という概念のもとで適切にカテゴリー化できること、および、〈あそこで猫が眠っている〉という概念を「あそこで猫が眠っている」という記号列によって適切にカテゴリー化できることが必要である<sup>4</sup>。前者が満たされていない場合には、話し手は当の事態を誤って〈あそこで猫が眠っている〉という概念のもとで捉えていることになる。たとえば、実際にそこで眠っているのは犬であるにも関わらず、話し手には猫として捉えられてしまっているというような状況である。「あそこで猫が眠っている」という記号列は〈あそこで猫が眠っている〉という概念を適切にカテゴリー化するものではあるが、そもそも事態のカテゴリー化が誤りであれば、聞き手の注意を向けるべき事態が話し手には適切に捉えられていないのだから、手がかりが有効に機能することはない。後者が満たされていない場合には、話し手の〈あそこで猫が眠っている〉という概念化は事態を適切にカテゴリー化するものではあるが、それを、たとえば「あそこで猫が走り回っている」のような記号列を手がかりに伝達しようとすることになる。この場合、当の発話は〈あそこで猫が眠っている〉という概念のもとに捉えられる事態を適切にカテゴリー化できるものではないため、手がかりとして有効に機能することはない。

カテゴリー化は、(定着度や状況による活性度などを脇におけば)カテゴリー化の対象と最も重なり大きい知識によって行われる。私(たち)の目の前に猫が現れた場合に、それを猫として捉えるのは普通であるが、哺乳類や動物として捉えるのは(動物園に哺乳類や動物がどれだけいるかを数える場合など)何らかの事情がある場合に限られ、まして具体物として捉えることは極めて稀であろう<sup>5,6</sup>。同じことは当然、言語記号によるカテゴリー化にも当てはまる。(3)・(4)はどちらも「読む」という語彙項目が用いられている。対象が本であれば、ページの表面に印刷された文字列から何らかの内容を理解することになるし、対象が社会の動きであればその時点までの様々な社会状況を踏まえ、以降の社会がどのようなものになるか予測を立てることになる。両者には〈観察可能な情報を材料に思考することで、何らかの信念を形成する〉という程度の共通性があると言えるだろう。(3)と(4)の「読む」はどちらも日本語に定着した用法であるため、その共通点もまた日本語の知識になってはいると考えられる。しかし、(3)と(4)の「読む」が、この共通点のもとに把握されていると見なすことは困難であろう。これは、先程の例で言うならば、猫と犬には哺乳類であるという共通点があることを根拠に、猫を見かけたとき人はそれを哺乳類として捉えると想定するようなものである。

- (3) 本を読む。
- (4) 社会の動きを読む。

品詞認定の対象となるのもまた、具体性の高い言語知識である。Langacker (2005, 2015 など) はしばしば、英語の *cook* という語を用いてこのことを説明している。*cook* は名詞としても動詞としても用いることができる。どちらの用法も英語において十分に慣習化しているため、名詞か動詞かを問わない *cook* が知識として定着していると考えすることは不可能ではない。しかしながら、そのことをもって、*cook* という語は名詞でも動詞でもない、あるいは名詞と動詞の中間に位置するなど考えるのは不合理だろう。名詞としての *cook* と動詞としての *cook* はどちらも知識として定着しており、使用事象においてはそのいずれかが用いられていると考えれば良いだけである。同じように、仮に全ての語彙項目が名詞としても動詞としても振る舞う言語があったとしても、その言語が何らかの仕方でモノや過程を表す限り、名詞や動詞が存在しないということにはならない。名詞か動詞かが問えないのは、あくまでも名詞としての使用や動詞としての使用から抽象化された単位についてであって、使用事象において用いられる具体的な知識の水準では、名詞・動詞のいずれかが用いられていると考えられるのである。Langacker (2015: 53) が述べるように、認知文法において普遍的だと主張されているのは、「文法的なカテゴリーとしての品詞であって、語彙的なカテゴリーとしての品詞ではない」ということである。

## 2.2. 名詞

名詞について、Langacker (2015) では (5)・(6) のように述べられている。簡単に言えば、グルーピングによって構成された概念（すなわち、モノ）をプロファイルする要素が名詞だということである。

- (5) 認知文法では、名詞はモノ (*thing*) をプロファイルする要素として規定される。モノはひとまとまりであるという性質、すなわち「単一性 (*oneness*)」によって規定される。 (Langacker 2015: 58)
- (6) 認知的過程に注目すると、単一の対象という概念は必ず、グルーピング (*grouping*) という操作に基づいていると言えるだろう。 (Langacker 2015: 58)

グルーピングとは、「複合的な概念を、より上位の目的のために単一の要素として把握すること」(Langacker 2015: 56) として規定される心的操作である<sup>7</sup>。ここでの「より上位の目的」としては、たとえば、対象を一つのモノとして実際に操作すること (e.g. 本を持つ。テーブルを叩く) が挙げられる。また、言語的側面に注目するならば、名詞が表す対象を動詞などが表す関係へと参与させることがその典型と言える。

グルーピングによって捉えられる典型的対象は、それ自体がグルーピングを促す具体物である。石やペットボトルのような具体物のまとまり性は、対象に内在する性質であるように感じられるため、主体によるグルーピングが行われているとは感じづらいかもしれない。と

はいえ、3.2 節でも述べるように、グルーピングがなければそれぞれの具体物が個物として立ち現れることはない。そのような操作を行っていると感じづらいのは、具体物の場合にはグルーピングによる把握がほとんど自動的に生じるためであろう。

グルーピングの働きが見て取りやすいのは、複数の具体物からなる集団の場合である。Langacker (2015: 59) は、team、stack、set、class などの例を挙げ、これらが不定冠詞の a を伴うなど、言語的には一つの対象として振る舞うことを根拠として挙げ、その指示対象がグルーピングによって単一の要素となっていることを示している。ここには、二段階のグルーピングが存在する。チームをチームとして捉える際には、それぞれの成員を個別の人物として把握したうえで、それらの人々を一つのチームとしてまとめ上げて把握している。このことは日本語の「チーム」を用いた次の例からも確かめられる。(7) ではチームの成員ではなく、それによって構成される集団を単一の対象として取り上げ、強いという性質を帰している。それに対して、(8) は、あるチームが他のチームと仲が良いということではなく、チームの成員同士の仲が良いということの意味している。このような解釈が可能であるためには、チーム全体が単一の対象として捉えられ、さらに構成要素であるそれぞれの成員も単一の対象として注意を向けることができるのでなければならない<sup>8</sup>。

(7) あのチームは強い。

(8) あのチームは仲が良い。

さらに、2.3 節で述べるように、グルーピングによってひとまとまりの対象となることで、事態であっても、モノとして捉えられ、名詞によって指示されることになる。

### 2.3. 動詞

動詞について、Langacker (2015) では (9)・(10) のように述べられている。簡単に言えば、順次的走査 (sequential scanning) を受ける事態 (すなわち過程) をプロファイルする要素が動詞だということである。

(9) 認知文法では、関係を表す表現を、過程 (process) をプロファイルする動詞と非過程的關係をプロファイルするその他の表現に区分する。 (Langacker 2015: 69)

(10) 過程とは、時間を通じて順番に走査される複合的な関係である。

(Langacker 2015: 50)

順次的走査は、事態を一つの全体として (のみ) 捉えるのではなく、時間経過と共に展開していく対象 (すなわち過程) として捉える際に働く心的操作である。たとえば、ボールの落下という過程を観察する際には、各時点におけるボールの位置を把握しつつ、時点  $t_1$  における位置  $L_1$  から  $t_2$  における  $L_2$ 、さらにまた  $t_3$  における  $L_3$  へと、徐々に下方に移動するという連続的な変化として捉える順次的走査が行われている。あまりにも当たり前であるために意識されづらいことではあるが、走査が  $[t_3/L_3] \rightarrow [t_1/L_1] \rightarrow [t_2/L_2]$  のように時間経過に沿わない

かたちで生じるとしたら、そこにボールの移動を見て取ることは極めて困難であろう。(対象としては) 同一の事態はまた、非過程的に捉えることもできる。その場合には、各時点におけるボールの位置が一つの連続体として捉えられ、軌跡というひとまとまりの対象となる。このような把握に用いられる心的操作は、総括的走査 (summary scanning) と呼ばれる<sup>9</sup>。

それぞれの走査によって把握されたボールの落下は、以下の例のように表現できる。(11)の「落ちた」は、順次的走査を反映しているため、動詞であることになる。一方で、(12)の「落下」は総括的走査を反映しており、さらに事態全体が単一の対象として捉えられている(すなわちグルーピングを受けている)と考えられるため、名詞であることになる。

(11) ボールが落ちた。

(12) ボールの落下を観察した。

Langacker (2015) は *explode* と *explosion* の違いを同様の仕方で説明している。前者は順次的走査を受けているために、過程を表す動詞である。一方で、後者は一回の爆発という事象を単一の対象としてグルーピングしているために名詞となる (Langacker 2015: 63)。英語の不定詞や分詞についても、総括的走査を反映しているために非過程的関係を表すとされる<sup>10</sup>。

これに対して、Broccias and Hollmann (2007) は、2つの走査の心理的実在性は疑わしいとして、分布を基準とした分類を提案している<sup>11</sup>。この提案は、認知文法に対する多くの誤解を含むものであり、その点については、Langacker (2008b) による丁寧な応答がすでに存在するため、ここでは議論の詳細には立ち入らない<sup>12</sup>。2つの走査の心理的実在性については上述のように、私(たち)の経験において、ある事態が(時間展開に沿って少しずつ現れていく)過程として捉えられることもあれば、全体として捉えられるということもあると指摘しておけば十分であろう。この違いがどのように生じているのかまでは明らかではないにせよ、違いが存在する以上、それを生み出す何らかの心的操作が存在することは疑い得ないのである。

#### 2.4. 形容詞・副詞・前置詞

形容詞・副詞はどちらも、非過程的な関係として規定される (Langacker 2015: 69)。両者の違いは、前者がモノをトラジェクターとする(すなわち、モノの性質を表す)のに対し、後者は関係をトラジェクターとする(すなわち、関係の性質を表す)という点である。このように規定すると、英語の伝統的な品詞としての前置詞は、トラジェクターだけでなくランドマークも有することを特徴とし、(13)のようにモノをトラジェクターとする場合には形容詞として、(14)のように過程をトラジェクターとする場合には副詞として働くものとして分析できる。

(13) The alligator in the lake (Langacker 2015: 51)

(14) He swam in the lake. (Langacker 2015: 51)

認知文法における品詞は、それぞれの言語における伝統的な品詞と完全に重なるわけではないということに注意されたい。たとえば、日本語の「青い」は伝統的には形容詞と見なされるが、(15) では文の述語となり、過程を表しているために認知文法では動詞だと考えられる。「青い」であれば、発話時にそのような事態が成立しているということが、「青かった」であれば、(典型的には購入時である) 過去の時点で「青い」という事態が成立していたということが述べられている。それに対して、(16) の「青い」は過程を表しているのではなく、林檎をトラジェクターとし、その性質を表している。このことは、(17) との対比によってより良く理解できる。(17) の「買った」は、先週青い林檎を買ったという過程によって、当の林檎を修飾している。その過程は過去に位置づけられるものであるため、「買う」ではなく「買った」を用いなければならない<sup>13</sup>。同じように、(16) の「青かった」は、形容詞ではなく動詞であることになる。つまり、(16) のように、いずれも名詞を修飾する場合であっても、前者は形容詞に後者は動詞に分類され、(15) のように述語になる場合には、いずれも動詞に分類されるのである<sup>14</sup>。

- (15) 先週買った林檎は、{青い／青かった}。  
 (16) 先週買った {青い／青かった} 林檎は、今ではすっかり赤くなっている。  
 (17) 先週 {\*買う／買った} 青い林檎は、今ではすっかり赤くなっている。

### 3. 基礎的な問題

本節では 2 節を踏まえ、「分布」と「普遍性」という品詞にかんする基礎的問題が、認知文法の立場からはどのように扱われるかを論じる。

#### 3.1. 分布による説明

動機づけを重視する機能主義的な言語学においても、多くの論者が個別言語の品詞（を含む文法カテゴリー）は分布によって規定されると主張している（cf. Croft 2016, Haspelmath 2018）。さらに、2.3 節で取り上げた、Broccias and Hollmann (2007) のように、認知文法の枠組みを採用しつつ、動詞と非過程的關係を表す品詞を分ける基準として分布を用いることを提案する論者も存在する。

ある言語記号の分布とは、他の言語記号との相対的な位置関係のことであろう。記号は形式と意味の対であるため、分布には元来、意味が要素として含まれていると考えられる。仮に意味を考慮せずに分布が成立するならば、形態素 a の直後にのみ現れるという分布的特徴を持つ形態素 b と、a と同音異義である形態素 c の直後にのみ現れるという分布的特徴を持つ形態素 d が、分布において等しい（つまり、b と d からなるカテゴリーが形成される）ということになる。このような知識のあり方を想定するのは明らかに馬鹿げている<sup>15</sup>。

言語記号同士の位置関係を正確に捉えさえすれば、ある言語の品詞について十分な理解が得られると言えるだろうか。Haspelmath (2020: 350) は英語の名詞を「定冠詞 the の後に現れ、完全な名詞句を形成することができる語」として定義している。このように考えるのは、たとえば、war は（対象としては）モノではなく事態であるにも関わらず、英語においては名

詞であるという点を捉えるためである。2節での議論から明らかなように、認知文法では対象それ自体の性質ではなく、主体による概念化によって品詞を認定するために、意味による規定に問題は生じない。では、このような分布による規定と、認知文法における意味による規定はどのような関係にあるのだろうか。

Harder(2010)によると、言語はコミュニケーションにおいて果たされる機能が、徐々に分化することで成立した記号体系である。近年の認知文法(Langacker 2016, 2020, 2021など)においても、このように言語構造とその機能を統合する説明が重視されている。これはつまり、使用基盤モデルにおいて重視されてきたボトムアップ的な志向だけでなく、機能による動機づけというトップダウン的な志向も併せ持っているということである。たとえば、Langacker(2020: 27ff.)は英語の名詞句が担う指示機能は、唯一的指示機能によっても、非唯一的指示機能によっても果たすことが可能であり、前者は固有名詞によって、後者はグラウンディング機能を果たす限定詞と、タイプ指定機能を果たす語彙的な名詞との組み合わせによって果たされると主張する。固有名詞・限定詞・語彙的な名詞は全て、名詞句が持つ指示機能に動機づけられているというわけである。また、これらは全てモノを指示する要素であり、主体によるグルーピングを反映していると考えられる。この分析が、先程のHaspelmath(2020: 350)による名詞の規定を包摂するものであることは明らかである。「定冠詞theの後に現れ、完全な名詞句を形成することができる語」と、Langacker(2020)における「語彙的な名詞」の外延は等しいと考えられるが、前者には「名詞」とされる語が定冠詞の後に現れることができるのはなぜかという観点に欠けており、(少なくとも機能主義的な説明としては)不十分なものに留まっている。

以上のように考えるならば、分布と意味が排他的であると見なす分析の妥当性は極めて疑わしいものとなる。言語獲得期の子供や、言語記述を行う研究者は、意味にかんする詳細な情報を参照することが困難であるため、観察可能な形式を手がかりに記号の分布を探ろうとする。このことの実践的な有効性は疑い得ない。しかしながら、分布を生み出すのはあくまでも機能、すなわち意味的な動機づけである。「意味ではなく分布を基準とする」というような考えは、少なくとも認知文法の観点からは成り立たないと言えるだろう<sup>16</sup>。

### 3.2. 名詞・動詞の普遍性

3.1節でも述べたように、多くの論者が文法カテゴリーの普遍性を否定している。一方でLangacker(2008a: 34)は、どのような言語であれ、少なくとも「名詞」、「動詞」、「主語」、「目的語」、「所有」という文法カテゴリーは存在するだろうと述べている。これはもちろん、英語の名詞と日本語の名詞が、あらゆる点で一致する振る舞いを示すというようなことを意味するわけではない。たとえば、英語の名詞は冠詞を伴うことができる(ものを含む)が、日本語にはそもそも冠詞は存在しない。普遍性はあくまで、基本的な経験に根ざしたプロトタイプと、(そのプロトタイプを概念化する際にも使用される)グルーピングや順次的走査などの基本的な認知能力の水準で捉えられるものである。

このように理解した場合に、認知文法が主張する意味での「名詞」、「動詞」の普遍性に疑いの余地はないと考えられる。私(たち)の生きるこの世界には本やテーブルのような具体

的個物が存在する。この当たり前の事実を成立させるためには、主体が具体物に内在する何らかのまとまりを捉える認知能力(すなわち、グルーピング)を有していなければならない。そのような能力を欠いた主体がこの世界と向き合う場合には、世界の全体がひとつながりの対象として立ち現れるほかないだろう<sup>17</sup>。そのような主体は、自身を一つの具体的個物と見なすことも当然できないため、私(たち)の言語コミュニケーションの相手にはなり得ず、したがって言語の主体と見なされることもない。

また、私(たち)にとってひとまとまりの対象として立ち現れるのは、それ自体としてのまとまりを持つ具体的個物だけではない。このことを理解するためにまず、具体的個物であっても、そのまとまり性は究極的には主体の概念化によるものであることを確認する。一冊の本が1つの具体的個物であることは自明であるように感じられる。しかし、それはなぜだろうか。(日本で流通している多くの)本には表紙としてカバーが掛けられている。少し乱暴な持ち方をすればカバーは外れ、そこには、本体とカバーという2つの具体的個物が現れる。カバーがかかっている状態の本が1つの具体的個物と見なされるのは、本自体が有する物理的特性のためではなく、あくまで本というものにかんする文化的知識の作用のためなのである。2.2節で検討したチームのような集団の場合もまた、このことの延長として位置づけることができる。

(典型的な)モノにはまた、視座や時点とは独立の同一性を有するという特徴がある。それぞれの主体にとっての世界の見えは、感覚器官の能力的制限から、世界全体のごく一部に限られる<sup>18</sup>。そのため、たとえば立体を把握する際に、実際に見えているのはその一面にすぎない。このとき、当の視座からの見えが、他の視座からの見えとは(まったく)独立に把握されているとしたら、どのようなことが生じるだろうか。そのような主体には、目の前にテーブルがあるというようなごく単純な事実を把握することすらできない。なぜなら、当の視座からの見えに含まれるのは机の特定の面のみであり、机の全体像ではないからである。机が机として見えるためには、当の視座からの見えが他の(仮想的)視座からの見えと統合されるのでなければならない。すなわち、机を見る際には、少し屈めば机の脚が見え、回り込めば机の裏面が見え……という全体像の一部として当の視座からの見えを位置づけているのである。このようなことが可能であるためには(つまり、そもそも立体を捉えるためには)、視座から独立した対象が存在する(という信念を有する)のでなければならない<sup>19</sup>。

経時的同一性もまた、(典型的な)モノが有する特徴である。モノは時点によって様々にあり方を変える。春には緑であった1枚の木の葉が、秋には赤く色づく。私(たち)にとってこの事態は、まさにここで言語化しているとおりに、1枚の葉に生じたこととして立ち現れる。このようなことが可能であるのは、1枚の葉は、色が緑であっても赤であっても、やはり同じ対象だという把握がなされているためである。葉の色が個体の同一性にかんする要件に含まれているのであれば、緑である場合と赤である場合とでは別の個体だということになってしまうだろう。

私(たち)の生きるこの世界には、事態もまた存在することは疑い得ない。(典型的な)事態は何らかの変化を含むものである。変化が生じるためには、時点 $t_1$ と(それより後に位置する)時点 $t_2$ とに共通して現れる対象が必要である。そのような対象が存在しなければ、 $t_1$

における世界の状態と  $\epsilon$  における世界の状態を、一つの変化としてまとめ上げる基準を失い、私(たち)が生きているような世界が立ち現れることはなくなる<sup>20</sup>。

すでに確認したように、(典型的な)モノは視座や時点から独立の同一性を有していなければならない。この同一性は少なくとも部分的には、モノが様々な過程へと参与するという概念化(つまり、モノとそれが参与する過程を個別に把握すること)が不可欠である<sup>21</sup>。このように、名詞が表すカテゴリーと、動詞が表すカテゴリーは相互依存的であり、どちらも人間の生活にとって不可欠なものと言えるだろう。認知文法が主張する名詞・動詞の普遍性は、言語にかんする主張としてだけでなく、私(たち)が生きているこの世界にかんする主張としても理解されなければならない。さらに言うならば、認知文法は、両者は実は別のことではないという視座に立つ言語理論なのである。

<sup>1</sup> 名詞のプロトタイプとしては具体物が、動詞のプロトタイプとしては行為者と被動者の間に成立する動的な事態が挙げられる。

<sup>2</sup> それぞれの使用事象において用いられる知識は、どれだけ具体的であるとしても、それ以前の使用事象から抽象化されたものではあるため、一定のスキーマ性を有することになる。ここでの具体的な知識とは、当の使用事象との一致度が十分に高いという程度の意味で理解されたい。

<sup>3</sup> 聞き手もまた、話し手のそのような意図を理解したうえで、自身の注意を調整する(であろうこともまた話し手は理解しているし、そのこともまた聞き手は理解しており……)という再帰的読心が成立している(cf. Scott-Phillips (2014))。

<sup>4</sup> 日常の些細な言い間違いのように、話し手が不適切なカテゴリー化を行っている場合であっても、聞き手がその誤りに気づき、提示された手がかりをあるべき手がかりへと心的に置き換えて理解することによって、話し手の意図が達成されることも珍しくない。しかしながら、そのような訂正が可能であるためには、話し手の提示する手がかりは概ね適切なものでなければならない。提示する手がかりが常に不適切であるような話し手には、どのような意図も認めることができないため、コミュニケーションは成立し得ないであろう。ここで検討しているのは、コミュニケーションが可能であるための条件となる典型事例なのである。

<sup>5</sup> もちろん私(たち)は、猫が哺乳類であり動物であり具体物でもあるということを知っている。ここでの「Xとして捉える」は「対象のXである側面を前景化して捉える」という程度の意味で理解されたい。このことはまた「Xの相貌のもとに捉える」(cf. 野矢 2016)という仕方でも表現できる。猫を具体物として捉えることは、猫が有する動物としての側面を抑制し、パソコンやコップなど、他の諸具体物との共通点に着目して把握することである。

<sup>6</sup> 猫の様々な品種にかんする知識および関心を有する人は、猫をただ猫として把握するのではなく、マンチカンやロシアンブルーなど、個々の品種に対応する知識のもとで捉えることが予想される。その人にとっては猫といっても均質なカテゴリーではなく、品種ごとにそれぞれ違って見えているのである(cf. Langacker 2016, 野矢 2016)。

<sup>7</sup> 認知文法では、「グルーピング」という用語が表す心的過程が時期によって異なることに注意されたい。Langacker(2008a: 105 など)では、ここでのグルーピングに相当する操作は、モノ化(reification)と呼ばれており、グルーピングは複数の対象を一つにまとめあげる操作として規定されている。現在(Langacker 2016, 2017, 2020, 2021 など)では、この意味でのグルーピングに相当する心的操作(の産物)は繋がり(connection)と呼ばれている。複数の対象に繋がりが生じると、それらが全体としてより大きな構造の一部となる潜在性が生じ、それが実際に活用されたのがグルーピングだというわけである。繋がりによって生じた要素が、より大きな構造の一部となっているかどうかは、あくまで程度問題であると考えられることからすると、繋がりやグルーピングもまた連続的であると言えるだろう。この点については3.2節におけるモノと事態の依存関係にかんする議論も参照されたい。

<sup>8</sup> つまり、ここでの「仲が良い」は成員間に成立する関係であるとともに、それに基づき、チームという全体へと帰される性質でもあったと考えられる。

<sup>9</sup> ただし、順次的走査と総括的走査は相互排他的というわけではない(Langacker 2008b)。ここでの議論は、あくまで、より優勢な方の走査に注目したものとして理解されたい。

<sup>10</sup> さらに以下のような場合には、非過程的關係がグルーピングの対象となり、名詞で表現されていると考えられる。

- (a) To fall would be disastrous. (Langacker 2015: 74f.)  
 (b) Falling is a horrible experience. (Langacker 2015: 75)

<sup>11</sup> 分布の内実については3.1節で検討する。

<sup>12</sup> たとえば、Broccias and Hollmann (2007: 509) は、語彙と文法は記号構造からなる連続体をなしているという記号的文法観は、使用基盤モデルと相性が悪いと主張している。その根拠は、(複数の記号からなる) 構文が知識として定着した場合、個々の記号の意味を組み合わせて全体の意味を導くという心的操作が行われなくなり、記号が意味を持つとは言えなくなるというものである。このことが(認知文法に内在する問題への) 批判の根拠になりうるのは、Langacker (1987b, 2008a など) が繰り返し批判する、記号の形式と意味は一定であり、記号を組み合わせた場合には、全体の意味は部分の意味の総和と等しいとするブロックの比喻を、ラネカー自身が採用してしまっている場合に限られる。ラネカーがそのような立場をとっていないことは、その記述から明らかであり、したがって批判は成立していない。

<sup>13</sup> 認知文法における従属的な節の扱いについては、Langacker (2014) を参照されたい。

<sup>14</sup> 次のような例の「青い」は、「青かった」との対立のもとで理解することも可能である。その場合には、(買った時点で何色であったかはともかく) 発話時において青いという解釈になるだろう。認知文法ではこの違いは、(16) の「青い」は基本的な層に属し、「青かった」との対立を意味に(はっきりとは) 含まないのに対し、(c) の(ここで挙げた解釈での)「青い」はそこから「青かった」を含むかたちで拡張された層に属するというふうに分えられる (Langacker 2016)。

(c) 先週買った青い林檎は、まだ食べ頃ではない。

<sup>15</sup> もちろん、音韻的な環境の共通性に基づく、何らかのカテゴリー化が生じる可能性は否定できない。ここでの問題は、形態素 b と d は、そのようなカテゴリー化によってのみ類として特徴づけられることになるという点である。

<sup>16</sup> Broccias (2021) は Broccias and Hollmann (2007) を発展させ、グラウンディングの可否によって、enter と into の違いを説明しようとしている。グラウンディングの可否を判定する基準は明示されていないが、おそらくは語形変化を用いていると考えられる。そうだとすると、これもまた分布による品詞認定だということになる。概念内容としては同じ(か、大きく重なる) 要素の一方がグラウンディング可能で、一方が不可能である際に、その可否は何によって決まるのだろうか。この点に踏み込まない限り、やはり説明は不十分なものとなってしまおうだろう。2.3節で取り上げた、順次的走査と総括的走査を持ち出すことで、その全てが明らかになるわけではないが、説明の端緒が開かれることは確かである(過程のインスタンスが現れるのは常に時間である (Langacker 2008a: 152) ということと、事態のグラウンディングを行うためには順次的走査が必要であるということには深い関係があるように思われる。この点については別稿に譲る)。

<sup>17</sup> もっともこれは、無理に言葉で表現するならばそのように言えるという程度のものである。

<sup>18</sup> ここでの「見え」は視覚だけではなく、聴覚や嗅覚など、さまざまな知覚・感覚を代表するものとして理解されたい。

<sup>19</sup> この点について詳しくは、野矢 (2016)、田中 (2022) を参照されたい。モノが視座から独立に存在するという把握は、コミュニケーションの基盤ともなっている。複数の主体が(身体的条件を含め) 視座を完全に共有することは不可能であるため、話し手が聞き手の注意を自身が意図した対象へと誘導する過程は、視座中立的なモノを介して初めて可能になることである。さらに言えば、それぞれの主体がある視座に立っている、すなわち、現実そのものとその見えは同一ではないという把握は、自己と他者がある水準では同じあり方をしているという理解に依存している。モノ(現実)と視座(心)は相互依存的なのである (Tomasello 2019)。

<sup>20</sup> 時間経過という概念自体が、対象の同一性および、それぞれの時点でのあり方に依存していると考えられる。

<sup>21</sup> Langacker (2009: 6章) は、モノの場合には同定(すなわち、どの対象か)が、過程の場合には存在(すなわち、生じたかどうか)が主要な関心事になると述べている。

## 参考文献

- Broccias, Cristiano and Willem B. Hollmann (2007) Do we need summary and sequential scanning in (cognitive) grammar? *Cognitive Linguistics* 18: 487–522.
- Broccias, Cristiano (2021) A new look at word classes in cognitive grammar. *Jezikoslovlje* 22: 269–293.
- Croft, William (2016) Comparative concepts and language-specific categories: Theory and practice. *Linguistic Typology* 20: 377–393.
- Harder, Peter (2010) *Meaning in mind and society: A functional contribution to the social turn in cognitive linguistics*, Berlin/New York: De Gruyter Mouton.
- Haspelmath, Martin (2018) How comparative concepts and descriptive linguistic categories are different. Daniël Van Olmen, Tanja Mortelmans and Frank Brisard (eds.), *Aspects of linguistic variation*, 83–113. Berlin/Boston: De Gruyter Mouton.
- Haspelmath, Martin (2020) The structural uniqueness of languages and the value of comparison for language description. *Asian Languages and Linguistics* 1: 346–366.
- Langacker, Ronald W. (1987a) Nouns and verbs. *Language* 63: 53–94.
- Langacker, Ronald W. (1987b) *Foundations of cognitive grammar* vol. 1: *Theoretical prerequisites*, Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2000) A dynamic usage-based model. Michael Barlow and Suzanne Kemmer (eds.), *Usage-based models of language*, 1–63. Stanford: CSLI Publications.
- Langacker, Ronald W. (2008a) *Cognitive grammar: A basic introduction*, Oxford: Oxford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2008b) Sequential and summary scanning: A reply. *Cognitive Linguistics* 19: 571–584
- Langacker, Ronald W. (2009) *Investigations in cognitive grammar*, Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker Ronald W. (2014) Subordination in a dynamic account of grammar. Laura Visapää, Jyrki Kalliokoski, and Helena Sorva (eds.), *Contexts of subordination: Cognitive, typological and discourse perspectives*, 17–72. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Langacker Ronald W. (2015) On grammatical categories. *Journal of Cognitive Linguistics* 1: 44–79.
- Langacker, Ronald W. (2016) Baseline and elaboration. *Cognitive Linguistics* 27: 405–439.
- Langacker, Ronald W. (2017) Cognitive grammar. Barbara Dancygier (ed.), *The Cambridge handbook of cognitive linguistics*, 262–283. Cambridge: Cambridge University Press.
- Langacker, Ronald W. (2020) Trees, assemblies, chains, and windows. Tiago Timponi Torrent, Ely Edison da Silva Matos, and Natália Sather Sigiliano (eds.), *Construction grammar across borders*, 8–55. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. (2021) Functions and assemblies. 児玉一宏・小山哲春 (編) 『認知言語学の最前線』: 1–54. 東京: ひつじ書房.
- 野矢茂樹 (2016) 『心という難問』 東京: 講談社.

- Scott-Phillips, Thom (2014) *Speaking our minds*, New York: Palgrave MacMillan. [畔上耕介・石塚政行・田中太一・中澤恒子・西村義樹・山泉実 (訳)『なぜヒトだけが言葉を話せるのか』東京: 東京大学出版会. 2021]
- 田中太一 (2022) 「言語の「かのように」性について」『東京大学言語学論集』44: 279-293.
- Tomasello, Michael (2019) *Becoming human: A theory of ontogeny*, Cambridge: Belknap Press.